

<実践報告>

小学校一年生が自分の命に向き合う授業のあり方

鈴木 邦明 横浜市立青木小学校

A Class on Thinking About One's Own Life for First Year Elementary School Students

SUZUKI Kuniaki: Aoki Elementary School, Yokohama City

研究の目的	小学校一年生における命を大切にすることができる授業のあり方について検討を行う
キーワード	命 小学校1年生 道徳
実践の目的	小学校一年生が命を大切にすることができる
実践者名	鈴木 邦明
対象者	神奈川県横浜市立青木小学校1年生(27名)
実践期間	2006年10月
実践研究の方法と経過	小学校1年生に対して、命に関する学習を取り組んだ。道徳2時間、国語1時間の合計3時間で取り組んだ。
実践から得られた知見・提言	<p>世界の子どもの生と死の状況に目を向けることや自分が産まれてきた時の親の思いや苦勞を聞いたことなどから、自分の命や家族の命を大切にしていこうとする心情が大きくなったことが子どもの感想からも読み取ることができる。</p> <p>また、3時間目の「生きている」ことについて考え、詩を作る活動が、子ども達の考えを深めることにつながっていた。それまでの2時間の学習をまとめ、その上で生きていくことについて真剣に考え、友達に一体感を持つことができる活動となった。それらは、子ども達の持つ生きることへの肯定感をさらに強めることにつながっていた。</p>

1. はじめに

いじめによる子どもの自殺が大きな社会問題となっている。これは命に関わる様々な問題を含んでいる。自殺という形で自分自身の命を大事にすることができなかったこと。また、いじめるといって周りの人の命を大事にすることができなかったことなどである。対応しなければならぬ多くの複雑な問題がある。

今回の実践においては、次の二つのことを目的とした。

「子どもが自分の命を大切に思う気持ちを育てる」

「命の学習についてのコンパクトなカリキュラムを作り上げる」

一つ目の「子どもが自分の命を大切に思う気持ちを育てる」については、先にも書いたように、近年、様々な形で子どもが自他の命を軽視している事件が見られている。宇都宮(2005)は様々な事件に共通するのは、きわだった命の軽視であり、彼らは死にまつわる悲嘆も知らないであろうと述べている。自分の命、そして周りの人の命を大事にすることができるような子どもに育てて欲しいという願いをもつての授業である。命の大切さ、素晴らしさを知り、いじめや自殺をしないようにしていくことを目指している。そして、生きることに対して前向きであるような子どもに育てて欲しいと願っている。

二つ目の「命の学習について、カリキュラムを作り上げること」については、コンパクトで効果の高いカリキュラムの作成を目指したものである。今までの様々な実践において、命についての学習を総合的単元学習として、多くの時間を費やして様々な教科領域で行っているものが多い。しかし、実際の学校においては、日々行うべき学習内容が多く存在する。そのため、多くの時間を命の学習に使うことができないのが実状である。多くの時間を使うことなく、教師のねらいを達成できるようなカリキュラムを作り上げることを目指した。

また、関東や近畿など都市部の都府県においては、近年の新規教員採用数の増加から経験年数の少ない教員が増えてきている。命についての学習は、教員としての経験や自分自身の親としての体験などの少ない教員にとっては、取り組みにくい単元である。それぞれの子どものおかれた状況が複雑であったり、決まった答えのないものが多く、指導が難しいものである。そのようなことをふまえて、経験年数の少ない教員にとっても取り組みやすいようなカリキュラムを作り上げることを目指した。

2. カリキュラムの検討

現在子どもが置かれている社会状況などをふまえて、小学校一年生での子どもが自分の命を大切に思う気持ちを育てる学習について考えたい。

小嶋らは、小学校一年生の心理的状況について、実際にものを動かすということではなく、頭の中でのものを取り扱うことができるようになる。また、認識と感情がそれぞれ高度になってくるだけでなく、両者が互いに接近し、そこに意志が生じてくると述べている。

これは、それまでの幼稚園児や保育園児とは違い、実際に体験などをすることを必要としなくとも状況等を理解することができるということである。文章で書かれたものから考えたり、他の人の体験を聞くことを通して、考えを深めたりすることが可能になるということである。また、そういった中で理解をしたことを行動へとつなげていくことができるようになることを意味している。

この単元においては、世界の中にある厳しい「子どもの死」をもとにして、ある程度客観的に自分の命の状況について知る。そして、次に「子どもが産まれた時の親の思い」をもとにして自分の命の大切さに気付かせたい。最後に、それまでの2時間の授業を生かしながら、クラスの皆で生きているということの意味について考えていきたい。「いきていること」という題名で、共同の詩を作る。その活動では、生きていくことの多様性(一人一人違っているということ)に気付かせるとともに、一つの詩を作ることで、クラスのメンバーとの生きていることの一体感を味わわせたい。そして、生きていくことを前向きに考えていくことができるようにしていきたい。

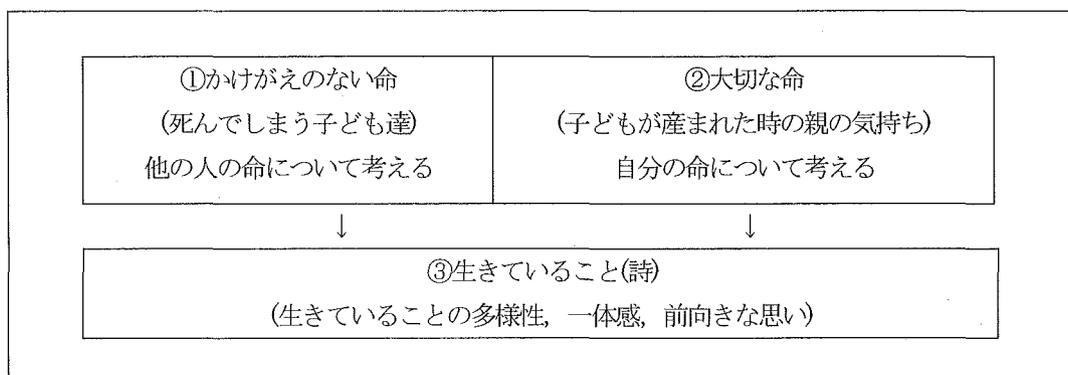


図1 カリキュラムの流れ

3. 実践

単元名 「いきていること」 3時間扱い(道徳2時間 国語1時間)

対象学年 小学校1年生

- ①かけがえのない命(1時間 道徳 3-(2)生命尊重) 10/24(火)2校時
- ②大切な命(1時間 道徳 3-(2)生命尊重) 10/25(水)3校時
- ③生きていること(1時間 国語) 10/26(木)5校時

単元の目標

「自分自身を見つめることに重点を置いて、命の大切さについて考える。」

3.1 かけがえのない命(1時間 道徳 3-(2)生命尊重)

(1)ねらい

自分の命がかけがえのないものであることを感じるができる。

(2)流れ

乳児死亡率(1歳になるまでに亡くなってしまう割合)について知る

- ・国による違い(日本:0.3% シエラレオネ:18%)
- ・日本の時代による違い(2006:0.3% 1970:1.3% 1950:6% 1920:17%)

幼児死亡率(5歳までに亡くなってしまう割合)について知る

- ・シエラレオネ 32%(約1/3が死んでしまう, 日本の約80倍)
- ・日本 0.4%

自分の命について考える.

次時で使うプリント(宿題)について説明する.

(3)ポイント

生きていられることを大事にする気持ちを持たせたい.

日本の恵まれている状況をイメージとして捉えさせたい.

一年生にとって感覚的・視覚的に理解できるように図(人型)を用いる.

(4)子どもの様子

0.3%(千人中で三人)の子どもが死んでしまうという考え方を理解するのが難しかった.

シエラレオネの子どもの状況を知り, とても驚いていた.

多くの子どもが日本に生まれたこと, そして今に生まれて, 幸せなのだということを理解することができていた.

(5)子どもの感想

いのちのたいせつさがわかった. . . . ①

いろいろなじだい, いろいろなくにのこどもがしんでかわいそうだとおもった. . . . ②

にはほんにうまれてよかった. . . . ③

いま, うまれてきてよかったなあとおもった. . . . ④

かわいそうだとおもった. . . . ⑤

さびしいとおもった. . . . ⑥

ありえないとおもった. . . . ⑦

あたまがよくなっていいことだとおもった. (科学の力で死亡率が低下した事) ⑧

みんなしんでる人はいきたかったのにしんだからかわいそうだとおもった. . . . ⑨

(6)考察

一年生が視覚的に理解ができるように図(人型)を用いたことで, 子どもにとっては分かりやすかったようである. 単に数値だけの比較(日本:0.3% シエラレオネ:18%など)では, 小学校一年生は理解ができなかったであろう.

小学校一年生の子どもはまだ視野が狭く, 物事を考えられる範囲が狭い. そのため, 世界の中で起こっている飢餓や深刻な病気による子どもの死などには, それまで目を向けたことがなかったようである. 感想の②, ③, ④, ⑦などにあるように, この授業で扱ったシエラレオネの子どもの状況と自分達が日頃暮らしている日本との違いを知り, とても驚いていた.

3.2 大切な命(1時間 道徳 3-(2)生命尊重)

(1)ねらい

自分が産まれた時の親の気持ちなどを知ることを通して、自分の命が大切なものであるという事に気付く。

(2)流れ

宿題でやってきたもの(親へのインタビュー)について発表する。

- ① 子どもが生まれた時にどんな気持ちだったか？
- ② 子どもが生まれるまでにどんな苦労があったか？

自分の命について考える。

(3)ポイント

自分が産まれてきた時の親の喜びなどを知ること、自分が大切な存在であるということを知ってほしい。

親にとっても、子どもに対しての思いを改めて考える良い機会となるであろう。

家庭状況が複雑な子どもへの配慮をする。

(4)子どもの様子

照れくさい様子の子どももいた。

何人もの子どもが、早産になりそうだったり、逆子だったりと生まれるまでに色々な苦労があったと発表していた。

親が教えてくれた、自分の子どもが産まれてきた時の気持ち：

生まれたての生まれたての手を触った時は感動で涙が出た。

人生の中で一番うれしい日でした。一生守っていく宝だと思いました。

とてもうれしかった。そして産まれてきてくれてありがとうという気持ちでした。

小さくて、かわいくて、とてもうれしく、幸せな気持ちでした。

元気に育ってくれるよう神様をお願いをした。

涙が出るほどうれしかった。一緒にがんばろうと思った。

(5)子どもの感想

家の人の話を聞いて

うれしかった。うまれてきてとってもよかったです。・・・⑩

ぼくがうまれたとき、こんなにたいへんだったのだとおもいました。・・・⑪

くろうしてじぶんをうんでくれたんだなあとおもいました。・・・⑫

友達の話聞いて

ほかのこもくるしいおもいをしていたんだ。・・・⑬

みんなくろうしてうまれたとをはじめてしました。・・・⑭

うまれてきてほんとうによかったです。これからもじこにあわないでながいきしてほしいです。・・・⑮

(6)考察

⑩, ⑪, ⑫にあるように, 親が子どもに対して生まれてきたことや今生きていることに対して素直な気持ちを表現したものを聞くことで, 子どもはとても安心をするようである。「あなたが生まれてきて, 本当によかった」と自分自身を丸ごと受け入れてもらう経験は子ども達にとってあまり多く経験することではないだろう。

日頃, 学級での子ども達の様子を見ていると, 自分自身をそのまま受けとめられず, 何か屈折しているという印象を受ける子どもがいる。よく聞いてみると, そういった子どもは親の離婚であったり, 忙しくて常に相手をしてもらっていないなど家庭環境に難しい問題を持っていて, それまでに苦しい思いなどをしているということがある。そういった子どもにとっても, 今回の生まれてきた時の親の気持ちを聞くという活動は, 自分自身をとて肯定的に受けとめることができる良い機会だと言えるだろう。

また, 生まれた時を振り返ることは, 子どもにとってだけでなく, 親にとっても良いことである。日常の生活の中で, 親は自分の子どもに対して, よくなって欲しいと思う気持ちからではあるが, 注意をしたり, 急かしたりということが多くなってしまいがちである。子どもが生まれた時の思いなどを思い起こすことは, 親自身も子どもとの接し方を見つめる良い機会となる。

3.3 生きていること(1時間 国語)

(1)ねらい

それぞれの子どもが生きていることとはどういうことなのかについて考え, それを詩にすることで, 生きていることの多様性, 一体感を感じ, 生きることにに対して前向きな気持ちを持つ。

(2)流れ

それぞれの子どもが生きていることとはどういうことなのか考える。

「いきているとは〇〇〇〇」という形の文にまとめる。

出来上がったものをつなげ, クラス全体で「生きていること」という題の詩にする。

感想をまとめる。

(3)ポイント

生きていることは, 人それぞれに捉え方が違うものである。

色々な考え方を一つに集めることで, 「生きていること」の多様性に目を向けるとともにクラスとしての一体感を持たせたい。

多様な考えをすることができるよう, はじめにいくつか例示をする。

(4)子どもの様子

始めにいくつか例を挙げたことにより, スムーズに考える作業に入っていった。

子どもが読んだだけでは, 理解しにくいもの(自分の名前を書いたもの, テストと書いたもの)については, 教師が後から説明を加えた。

最後に教師が考えた「いきているとは, みんなちがっていること」という文を加えた時に子

どもから拍手が起こった。

(5)子どもの感想

ぶんを見て、せいちょうがわかりました。・・・⑩

みんながちゃんとかんがえているのだなあとおもった。・・・⑪

みんながともだちになれてよかった。・・・⑫

いきているというのがますますだいじになりました。・・・⑬

みんな「いきること」についてよくわかっているなあとおもいました。・・・⑭

(6)考察

多様性を知ることができた。巻末の資料の詩にもあるように、それぞれの子どもにとって、「生きている」ということは、それぞれ違っている。人それぞれは違うということは、日々の生活の中で忘れがちである。学校生活においては、他の人と同じ様な行動を求められる機会も多い。それは円滑な学校生活を送るためなのだけれども、捉え方を違えてしまうと、「人と違っていることはだめだ」という事になりかねない。今回の授業では、詩を作ったことで、「人はそれぞれ違っている」という事をととも分かりやすく確認することができた。

人が生きていく時、誰も一人で生きていくことはできない。年齢が小さい程、他の人に助けられている部分が多い。周りの人も生きていて、自分も生きている。今回の授業で「共に生きていく」ことを意識する良い機会となっていた。そして、皆で一つの詩を作り上げたことで、学級としての一体感が生まれた。

4. 変容

命についての認識の調査(質問紙法によるアンケート)

1回目(授業前) 2回目(授業後)

表1 自分の命を大事にしているか(合計24人)

	とても大事にしている	少し大事にしている	あまり大事にしていない	全然大事にしていない
1回目	15	7	2	0
2回目	21	3	0	0

表2 家族の命を大事にしているか(合計24人)

	とても大事にしている	少し大事にしている	あまり大事にしていない	全然大事にしていない
1回目	17	5	1	1
2回目	22	2	0	0

表3 友達の命を大事にしているか(合計24人)

	とても大事にし ている	少し大事にして いる	あまり大事にし ていない	全然大事にし ていない
1回目	14	7	2	1
2回目	15	7	2	0

5. 研究のまとめ

5.1 一年生の時期に自分の命について深く考えることについて

現在、いじめなどによる中学生の自殺が問題となっている。第二次性徴の時期の前までに命の大切さについてしっかりと学ぶ機会を持たせたい。命を大切にしていこうとする心情を育てていくことは、どの時期においても必要なことである。段階を追って、取り組ませたい。小学校低学年においては、生きることについての考え方をしっかりと持たせることに重点を置きたい。それらを土台として、小学校中学年から中学校において、知識を得ること、体験の中で理解していくことを行っていくことが大事となる。(図2を参照)

今回授業を行った小学校一年生は、命の学習の土台となる部分を育てることを目標としている。年齢が小さいうちに子ども達に生きていくことへの肯定感(前向きさ)を持つきっかけをたくさん作ることが望ましい。生きていくことの嬉しさ、ありがたさ、一体感などを感じるものが今回の学習のねらいの一つである。そういった経験の積み重ねが、命の学習の土台をしっかりとしたものにしていく。命の学習に関しては、小学校中学年以降、命に関わる様々な知識を得たり、体験をしたりする。小学校低学年までで作られた土台はそれらを支えていく大事な部分である。成長する中での体験は楽しく、すばらしいことが多い。しかし、時にいじめなどその子どもにとって厳しいと感じられることもある。そういったことに遭遇しても、命に関しての土台がしっかりとしたものであれば、受けとめられる可能性が高い。その土台がしっかりとしたものでなければ、小さなアクシデントなどでも、受けとめることができなくなり、最悪の場合、自殺などへと至ってしまうこともある。

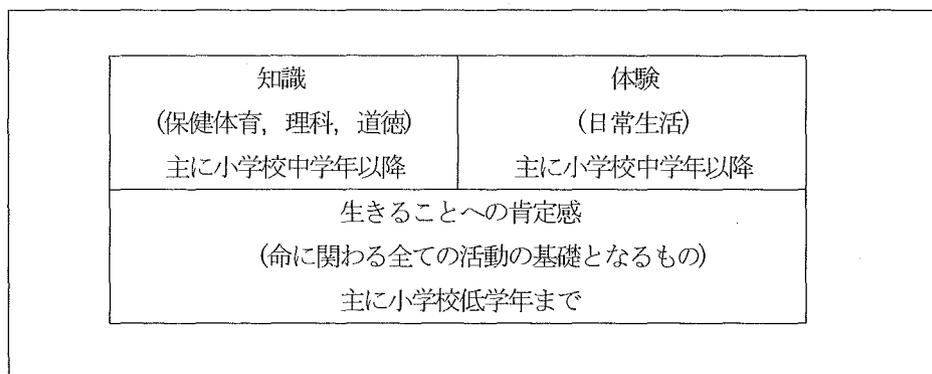


図2 命の学習についての年齢と内容の関連

5.2 自分自身の命を大切に思う気持ちについて

アンケートの結果からも、今回の授業によって、自分自身の命を大切にしていこうという気持ちが育ったことが分かる。特に自分が産まれてきた時の親の思いや苦勞を聞いたことは、子ども達にとって大きな意味があった。子ども達は、それまでそういった話をあまり聞いたことがなかったようで、親の話はとても印象深かった様である。

また、世界の子ども達の生と死の状況に目を向けることもあまりなかったようである。日本に生まれ、割と不自由なく暮らしていることが子ども達にとって当たり前である。それは世界的に見ると当たり前のことではないことを知り、命のありがたさを感じることに繋がっていた。

5.3 カリキュラムについて

3時間というコンパクトなカリキュラムを作り、実践した。アンケートの結果(表1, 表2, 表3)を見ると、この3時間でねらいとする「自分の命に向かい合う」ということは概ね達成された。「①世界の子どもの生と死の状況を知る。②自分が産まれたことについての親の思いを知る。③「生きている」ことについて考え、詩を作る。」という3時間の流れは適当だったと言えるだろう。

特に、3時間目の「生きている」ことについて考え、詩を作る活動が、子ども達の考えを深めることに繋がっていた。それまでの2時間の学習をまとめ、その上で生きていくことについて真剣に考え、友達を一体感を持つことができる活動となった。それらは、子ども達の持つ生きることへの肯定感をさらに強めることに繋がっていただろう。

5.4 課題

今回の学習のねらいであった自分や家族について大切に思う気持ちに変化があったが、アンケートの結果を見ても分かる通り、友達を大事に思う気持ちには大きな変化がなかった。友達が産まれた時の苦勞などを聞くという活動は行ったが、友達と直接関わりを持つ機会は多くなかった。次の段階として、友だちとの関わりについて重点をおいた学習を行いたい。そうすることで、命の学習がさらに深まるであろう。

文献

宇都宮直子, 2005, 「死」を子どもに教える, 中公新書, p.15

小嶋秀夫, 松田惺編, 1981, 小学生の心理, 有斐閣選書, p.130

資料

詩「いきていること」

いきていること

あおきしょうがっこう一ねん三くみ

いきているとは、あいされること。
いきているとは、あそぶこと。
いきているとは、のむこと。
いきているとは、ちょうなどがあること。
いきているとは、まちじゅうがいきていること。
いきているとは、いきをすること。
いきているとは、えをかくこと。
いきているとは、ほんをよむこと。
いきているとは、あそぶこと。
いきているとは、かんじること。
いきているとは、はちゅうるい。
いきているとは、ちきゅうだから。
いきているとは、ともだちだから。
いきているとは、いのちがあること。
いきているとは、うまれること。
いきているとは、ほねがあること。
いきているとは、せいちょうしていく。
いきているとは、いのち。
いきているとは、いきをしていること。
いきているとは、見えること。
いきているとは、あおきたろう。(子どもの名前仮名)
いきているとは、テスト。
いきているとは、あそんでること。
いきているとは、みんなとあそんでること。
いきているとは、ちゃんとたべること。
いきているとは、うごかすこと。
いきているとは、かんがえること。

いきているとは、みんなちがっていること。

(2007年4月30日 受付)